

# 推薦の言葉

私が大学を卒業した1980年当時、大腸内視鏡検査は越え難いベルリンの壁のように消化器内視鏡医の眼前にそびえ立っていた。そして、その様は今もあまり変わっていない。このように30年以上もの長い間、大腸内視鏡検査が難しい検査としてあり続けてきたのは、レッスン法をマンツーマン法（大腸内視鏡検査を行っている最中に直接指導する方法）に頼りすぎていたことに原因があったと考えている。というのも、マンツーマン法には「直接指導できる」という大きなメリットがある反面、「場所や研修人数に制限がある」だけでなく「指導医が間違っていると修正できない」という致命的な問題点があるからである。そこで、私が2000年7月に発足させた「二木会（にきかい、<http://home.att.ne.jp/kiwi/nikikai/index.html>）」という大腸内視鏡挿入法の勉強会では、ビデオカンファレンス法（スコープ挿入中のモニター画面を録画したビデオをもとに多くの指導医と研修医が一堂に会して挿入法を勉強する方法）によるレッスンを積極的に行っている。そして、この二木会の中心メンバーの1人が仲道先生である。

ところで、私と仲道先生との出会いは、2000年10月に神戸で開催されたJDDWで私が大腸内視鏡挿入法について発表した際にフロアから仲道先生が質問したときに遡るが、当時から仲道先生は他の先生方とは異なった独特な感性で大腸内視鏡挿入理論を構築していた。ただ、仲道先生の大腸内視鏡挿入理論はやや難解で、二木会会員をして“仲道ワールド”と言わしむるほどのものであるが、仲道先生の挿入理論の正しさは仲道先生の指導を受けた研修医が驚異的な速さで上達することで十分に証明されている。本書はこの“仲道ワールド”をインターネット上に公開した「NACKの大腸内視鏡講座」が源となっているが、書中には仲道先生特有の表現や模式図を使った解説とともに高価なコーンモデルの代わりに紙コップやペットボトルを使ったユニークなトレーニング法がふんだんに掲載されている。そのため、本書をみて「これで大腸内視鏡挿入技術が本当に上手くなるのか？」との疑いをもつ方もいると思うが、この突飛な内容こそが“仲道ワールド”の真髄である。最初はわかりにくいと思うが、じっくりと読み込んでいくうちにいつの間にか“仲道ワールド”への門が開き、大腸内視鏡挿入法マスターへの近道を歩み始めることができるようになるのである。

本書は、これから大腸内視鏡検査を始めようとする初心者の先生から大腸内視鏡挿入法の習得に悩んでいる初級者・中級者の先生、そして研修医を教える機会のある上級者の先生を含めたすべてのコロノスコピスト必携の書であると、私が自信をもって推薦出来る一冊である。

2011年7月吉日

松島病院大腸肛門病センター 松島クリニック  
鈴木康元